

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第二回

3章 若鷺、牙を研ぐ 文政九年（一八二六）

時は文政九年（一八二六）の春、場所は多摩川のほとりにある小村、川崎在稲毛村である。

伊奈家の用人、田辺昇太郎は、二度目の祝言を挙げていた。

昇太郎の父・佐藤藤佐は、鶴岡藩の郷士の出身である。低い身分の悪たれ坊主で、この調子で育ったら獄門磔にも、なりかねない可能性が案じられ、そうになったらお家断絶になってしまふ、と本気で心配した母が、路銀を用立て江戸へ行かせることにした。

そこで不良の面目躍如、恐れを知らぬ掟破りの手法を駆使してトラブルを解決し、凄腕の公事師として名を轟かせ、出世魚のようにして次々と主君を変えていった。

藤佐が千六百石の中堅の旗本・伊奈遠江守の下屋敷で、下男として仕えたのは九年前、昇太郎が十四歳になった頃だった。そこで

も藤佐は主の部下の不祥事を露見させ、その功績で正式にお抱えの身になった。

その頃、伊奈家の当主と祖父が相次いで亡くなり、十二歳の若君が家督を継ぐことになった。

そこで藤佐と昇太郎は虎ノ門の伊奈家屋敷に住み込み、若君の補佐に務めた。

昇太郎は若君と年が近く、主従の関係ながらも友人のように付き合い、肩肘張らない気楽な生活を送っていた。

やがて父の藤佐は、伊奈家の用人である田辺家の養子となり、正式に伊奈家の御用人に取り立てられた。昇太郎も伊奈家に仕えることになり、最初の妻を娶ったのが四年前。

以来、田辺昇太郎と名乗っている。

だが昇太郎は自分の名前が嫌いだった。

——昇るだけなら、煙にだってできるだろうよ……。

そこに全く意志が働いていないようなのが、どうにも気にくわない。

おまけに離縁した前妻は、一心に尽くしてはくれたものの、片田舎のちっぽけなお家が何より大切、という考えに凝り固まっていて、昇太郎を立派な用人に仕立て上げようということばかりが先に立っていた。

それがまた、昇太郎の癩しやくに障さわった。

——おいらをあんな狭苦せまくるしい田舎に押し込めるつもりかよ。

そんなこんなで面白くない昇太郎は吉原通よしわらいを覚え、賭場とばにも出入りするようになった。

もともと父の藤佐も上京してきた時、宿場の旅籠はたごよりは女郎屋じようろうやの方が洒落しゃれている、と十五日続けて女郎屋に居座り続けた豪傑だ。

そんな血筋からいっても、田舎旗本の用人などに収まるタマではないのだ。

勢い昇太郎は、家に寄りつかなくなった。

父の藤佐は公証人として有能で財を成したが、昇太郎はそれを湯水の如く蕩尽とうじんした。

そんな昇太郎に愛想を尽かした前妻が、ふたりの幼い女の子を置いて、実家に戻ったのが昨年のちようど今頃。

せいせいしていいや、とは思ったものの、ふたりのややこの面倒は二三歳の昇太郎の手には余った。そこで勧められるままに、後妻を娶ることにした。

その結果、祝言を今、挙げているというわけだ。

大あくびをした昇太郎は、あわてて周囲を見回した。

幸い、彼の失態に気づいた者はいないようだ。

今は祝言の席で、昇太郎は新郎、つまり主役だ。あくびするなんてとんでもないことだが、『つまらんものはつまらんだ』と心中で吐き捨てる。

庭先からは多摩川の流れが光っているのが見える。土手の桜は今が盛りだ。

花見の方がよかったな。

あくびをかみ殺し、隣にちんまりと座っている小柄な花嫁を、ちらりと横目で眺める。

——器量は、香苗よりちつとはマシかな。

香苗とは一年前に離縁した前妻の名である。二人の間に生まれた「つる」と「きは」と名付けた二人の女の子は、昇太郎が引き取ることになった。

——「ややこ」というものは、ややこしいからそう呼ぶのだろうか。

駄洒落だじゃれになっていることに気がついて、昇太郎は気を良くした。

それから、親族席の首座しゆざに座っている父親の横顔を見る。

——ややこしい離縁をこじらせずに済んだのは、親父殿のおかげではある。

だからと言って、感謝する気はさらさらない。

争いしらすごとがお白州で裁かれる時は、弁護士が必要になる。だが裁きの場は親族しか参加できないしきたりだった。だから旗本の間の

争い事では、弁護人は養子になることがあった。

そうすれば身内となり弁護できるからだ。こうした仕事をする者は公事師と呼ばれた。

公事師として名を挙げた父・藤佐は、四十を超えながら、あちこち出歩いて厄介やっかいごとを引き受けては、ぶつぶつ文句を言いながら、いつの間にか片付けてしまう。

藤佐は稲毛村の田辺庄右衛門しやうえもんの家で起こった争いを収めるため、田辺家の養子となり訴訟を片付けた。

そして二八歳で田辺家の養女、ふぢと結婚し、生まれた長男に田辺昇太郎と名付けた。

悔しいけれど、親父殿きこつの気骨は大したものだ、と認めざるを得ない。

——おいらは根無し草ねなぐさの風来坊ふうらいぼうだ。いつかは親父殿のように、好き勝手やって自由気ままに生きていきたいものだなあ。

昇太郎は万事に鷹揚おつようだったが、自分を縛ろうとすることだけは、どうにも我慢がまんがならない。

今回の新妻は、どうもそうした点は心配がなさそうだ。なにせ一緒に手習いしている、気が合う兄貴分の山内豊城やまうちとよきの奥方おくがたの妹だから、彼とは義理兄弟になるのも嬉しい。

名は体を成す、と言う。祝言前に少し話したところでは、瀧子たきこと

いう名にふさわしく気は強そうだが、気立てがいい女らしい、と感
じた。

——このおなごは気っ風がよさげなのがいい。

こんなおいらにもいつか、自分の名を変える時が来るんだろうか、
とふと思う。

父・藤佐は、旗本に評判がいい。有力者と知り合い、信を得るの
に長けていた。媚びずに筋を通した上で、相手の利を説く。その態
度は不敬や傲慢、と武家には嫌う者も多いが、有能で明晰な相手に
は信頼された。

父の伝手を使えば、相手が武家ならたいてい簡単に会えた。身分
こそ低いが、武家の体制が揺らぐ中で、昇太郎は万能のフリーパス
を手にした貴公子のようなものだった。

そんなことをつらつら考えながら、隣をちらりと眺めると、父も
大あくびをしていた。

どうやら、おいらが親父殿の嫡子だということだけは間違いなさ
そうだ、と昇太郎は苦笑する。

祝言の翌日。

昇太郎は番町の薬園に出かけて行った。六尺にやや足りない、恰
幅のいい老人が縁側でひなたぼっこをしている。

「よお、爺ちゃん、遊びにきてやったぜ」

「おお、悪たれの昇太郎か。久しぶりだな。元気だったか？」

「もちのろんよ。また、オロシアの話聞かせてくれよ」

「いいともさ。儂は家齊さまに直接お話ししたが、そこで話さなかつたことが、まだまだたくさんあるからな。前回はどこまで話したかな。確かエカテリーナ女王が愛しきポチョムキン将軍と永久の別れを告げたあたりだったかな」

「その話は十遍くらい聞いて、耳タコだよ。そうじゃなくて、オロシアの医術のあたりを聞きたいんだよ」

「なんだ、そこか。生憎だがそこら辺はもう、よう思い出せんわ。儂の話を丁寧聞き取ってくださいった桂川甫周先生の本を読めばよからう」

「それもこの前聞いたけど、爺ちゃんの話聞き書きした本は今ではご禁制なんだとさ。親父殿が八方手を尽くしてくれたけど、どうしても無理らしいんだ」

そうか、とうなずいた老人は、大あくびをした。

昇太郎は縁側の、老人の隣に腰を下ろし、次の言葉を待つ。

老人の名は大黒屋光太夫。伊勢の豪商だった彼は天明二年（一七

八二）師走、紀州藩の蔵米を江戸に運ぶ途中で海難に遭い漂流し、樺太に流れ着いた。以後、部下の船員・磯吉らと共に十年間、帝政

ロシアで過ごし、エカテリーナ二世にお目通りし、特別のお許しを以て帰国した。

十七人で船出をしたが、帰ってきたのはたった三人だった。

そんな波瀾万丈の物語を、時の將軍家者が直接聴聞した結果、

光太夫は旗本格扱いになり一躍、時の人となった。あれから三十四年。今や光太夫も好好爺になり、縁側でのんびりひなたぼっこをする老猫のようになっていた。

昇太郎は時々その家に行き、彼の冒険談を聞くのが好きだった。

「オロシア」の医術は、草根木皮を用いず水薬を多く用いるという。話を聞いて昇太郎は考えた。

徳川の世では門閥ばかりが尊ばれ、その道以外で出世するには武術、文芸、医術しかない。

特段出世をしたいとも思わないが、自由に生きるには身分は高いに越したことはない。なにより医家になれば生まれや育ちに依らず出世の階段を自力で上っていける、というところが気に入った。

「おいらは医者になりたいんだ」と昇太郎は父に言った。

昇太郎は長男だった。長男は家を守れ、と言うのが普通の家だ。

だが、破天荒な父・藤佐は、昇太郎の決意を聞くと、「そうか」とうなずいた。

「実は僕も、弟の然僕の方が家督を継ぐのにふさわしいと考えてお

った。ちょうどよい。然僕に御家人の株を買い、佐藤を名乗らせよう。お前は家のことは考えずともよい。今は伊奈家の御家人だから、思う存分に修行できないだろうが、とりあえずやってみるがいいさ」

なんの躊躇ためらいもない答えに、却かえって昇太郎は拍子ひょうし抜けした。

医を志すなら医の頂点、將軍の侍医と知り合っておいた方がいい、ということで紹介してくれたのが三歳年上の奥医師、松本良甫りょうほだった。

松本家は代々医家で法眼ほうげんを輩出した名家だった。

ところが松本家の先々代かくらんが霍乱かくらんし、お家断絶の危機になった。盛り返した先代が先日亡くなり、良甫が七代松本家の当主になったばかりだった。

そんな風に、藤佐の差配は相手の実利を最大限に引き出した。それが多くの旗本から高い評価と強い支持を受けた。

その結果、財を成し暮らしにゆとりができ、それを必要なところに必要な時に惜しげもなく投じるといふ気っ風のよさもあつたため、評判は一層上がっていった。

昇太郎はそんな父・藤佐から、いつもこう言い聞かされていた。

「よいか、昇太郎。金は大事だが、所詮しよせんは浮世うきよの徒花あだばなよ。この世とおさらばする時は、この身についてくることはない。だから金を大切にしつつ、執着はするな。身を浮かべるためには、金は惜しむこ

となく、余さず使えばいい。儂はそうして来た。だからお前もそうせえ」

昇太郎は気前がよく、身分にこだわらない伸びやかな付き合いをする度量もある。

家名に囚われず、思うままに生きる自由人の父の血筋を、昇太郎は最も濃く受け継いでいた。

だからこそ、父は昇太郎に家を継がせるということに固執しなかつたのかもしれない。

大黒屋を訪問した翌日、それは祝言の二日後だったが、昇太郎は、松本良甫と隅田川の土手を散歩していた。

満開の桜が、昇太郎の新たな船出を祝ってくれているようだ。

「よい嫁御ではないですか」と松本良甫が言うと、昇太郎は照れうなずく。

「今のところは、うまく角を隠しているようだよ。まあ、そこんところはお互い様だけど」

「しかし祝言を上げた翌日から吉原通いとは、さすがにいかがなものかと思えますけどね」

昇太郎は肩をすくめた。彼は父の金をくすねて、吉原に足繁く出入りしていた。それが前妻との離縁の理由のひとつになったのだら

う、と松本良甫はうすうす感じていた。

「実は明日、昇太郎殿を、お誘いしたいところがありましたね」

「よし、乗った」

「どういう所か、聞かずに決めてしまつてよいのですか？」

「良甫殿はおいらの気性と望みをよく知つておる。そんな良甫殿が持ちかけてくる話を受けずして、どうせよというのだ」

松本良甫は微笑した。

そして、この人の、こういう大らかなところが相手を惹きつけるのだろう、と思つた。

翌朝、ふたりは江戸の文化の中心地、本石町三丁目にある長崎屋に向かった。

道々、松本良甫は、オランダ商館の江戸参府の仕組みについて教えてくれた。

江戸参府とは長崎・出島のオランダ商館が献上品と情報を幕府に伝えるため定期的に行なう、参勤交代のようなものだという。

献上品は幕府への恭順の意を示す。旅費は諸大名と同じく、オランダ商館が負担する。

もうひとつ幕府が重視しているのは、世界の情報を得ることだ。

上京にあたつて長崎商館長は「阿蘭陀風説書」なる、国際情勢を

記した文書を持参するのがならわしになっている。それは幕府にとって、何物にも代えがたい、貴重な海外に関する情報源だった。

「万事は幕府にとって好都合な仕組みだな。おいらが解せないのは、それだけ経費が掛かる行事をなぜ、出島のオランダ商館が続けているのか、ということかな。オランダに相当のうま味がなければ、長続きするはずがないはずだからな」

昇太郎が腕組みをしようと、松本良甫は首を傾げて言う。

「そのあたりは、わかりかねます。むしろあなたの父上の方がよくおわかりではないですか」

父・藤佐は、ものごとを金子きんすの観点から見るクセがあった。

道理や建前たてまえは、金子を前にしたらお飾りにすぎない。そして本音がわかれば人のこころを掴たむのは容易たやすい。

そう考えると、確かにその辺は親父殿の得意分野かもしれない。昇太郎は、後で親父殿に直接訊ねてみようか、という気になった。

春の嵐が、轟ごうと鳴り、昇太郎の髪を乱して吹き抜けていった。

当時の長崎のオランダ商館は、鎖国下はくこくの日本で唯一外国に開かれた窓だった。

商館長が四年に一度、江戸参府をするが、その際には商館付医師も同行し、江戸の蘭学者たちと交流し、新知識の伝授をするのだと

いう。

市井しせいの人々は謁見えつけんは叶わないが、將軍侍医じせいの松本良甫は謁見の場になんなく参加できた。

それはまさに医を志す決意した昇太郎にとって、降って湧いたような絶好の好機だった。

聞けば三日前、昇太郎が祝言を挙げたその日に、蘭館付のその医師が幕府の侍医たちの前で、目の解剖と目の手術一般について講義したのだという。

「祝言も悪くないが、できればおいらも、そっちへ行きたかったよ」話を聞いた昇太郎が、悔しそうに地団駄じだんだを踏むのを見て、松本良甫は微笑した。

「しかししも、その手術を見学していたら、昇太郎殿にとってはむしろ毒になったでしょう。蘭語を一字も解さないのであれば、聞いていてやるせないだけでしょうからね」

「確かにそうかも……」と、昇太郎もうなずかざるをえない。

「昨日は幕府お抱えの鍼灸しんきゅうい医、石坂宗哲いしがかそうてつ殿が、蘭医の要請に応じ鍼灸の技を見せたそうです。同席した鍋島望城なべしまもちき侯は、蘭医が伝統的な鍼灸の技を馬鹿にしているように見えた、と憤慨ふんがいしておられたそうです。今日は蘭医と一日中、対談をされるといっているので、末席まつせきの我等われらにも質問する機会があるやもしれません。そういう意味では、蘭学を

学んでいない昇太郎殿にとって、今日の方が好都合だと思われま
すが」

悔しくて憤慨していた昇太郎は、「なるほど」と納得し、すつきり
した顔になる。

そして、なにごとにもよいように取る良甫の育ちのよさを、改め
て感じた。

良甫は土手の桜を見上げ、「阿蘭陀も 花に来にけり 馬に鞍」と、
長閑な声で吟じる。

「おお、風流な句だな。良さんにしては、まずまずの出来だ」

「当たり前ですよ。今のは芭蕉の作ですから」

松本良甫は、そう言つて苦笑した。

長崎屋の軒先には紅、白、青という三色の段幕が張られ、白布の
中間には蘭語の文字と思われる、見慣れぬ文字が染め抜かれていた。

立派な門構えをくぐり中に入る。松本良甫が名乗ると、二階の大
広間に通された。

部屋には十人ほど、禿頭が並んでいた。良甫はそこで年嵩の男
性の前に行き挨拶をした。

そんな良甫を眺めていると、良甫の隣の席に座った青年が、ひど
く緊張している様子に気がついた。その膝には紫の風呂敷包みを大

事そうに抱えている。

良甫の席に移った昇太郎は、青年に尋ねた。

「なあ、お前さんも初めての御目見得かい？」

「ええ」とうなずき青年は、ちらりと昇太郎を見たが、そのまま俯いた。

「その風呂敷包みは、蘭人の先生への贈り物かい？ 何なんだよ、それ」

「植物の押し花です」と答えた青年に、「なんだ、おなじやあるまいし、花を贈るとはねえ」と昇太郎が言うと、青年はそれ以後は何を問いかけても、貝のように口を閉じてしまった。

良甫が、昇太郎の側に戻ってくると、小声で言う。

「今私をご挨拶したのは筆頭侍医の法眼で眼科の大家、土生玄碩殿です。一昨日の眼の手術を見て質問を山ほど抱えておられるそうです。利に聡く『この世で一番重要なのは金である』と言って憚ることのないお方です。奥医師の方々は誰もみな鶉の目鷹の目で来られておりますので、末席の我々には、直接お話しする機会は与えられないかもしれません」

うなずいた昇太郎だが、良甫の言葉に同意したわけではない。

お上品な奥医師を押しつけて質問のひとつもしてやろう、と虎視眈々と考えていた。

この会に何かしらの爪痕を残せなければ、蘭人を見にわざわざ出張って来た甲斐がない。

そして、それくらいできなくてどうする、と密かに自分を鼓舞した。

やがてふたりの若者と、老人がひとり、部屋に入ってきた。その後から異国の服を着た青年が続き、広間の床の間の前の椅子に座った。

「あれが今、日本で一番評判が高い蘭医、シーボルト先生です」と隣の良甫がささやく。

やがて広間に集まった奥医師から質問が始まった。

次々に出される専門的な質問は時に蘭語混じりで、蘭語も医学も学んでいない昇太郎には、とうてい理解不能なことばかりだった。

巳の刻みく（午前九時頃）から始まった熱心なやりとりは一刻半いっときはん（三時間）ほど続いた。中でも蘭医の関心を惹いたのは、欧州で行なわれている痘瘡とうそうの予防法、牛痘接種ぎゅうとうせつしゅによる種痘術しゅとうじゆつの実演だった。

蘭語によるちんぷんかんぷんな質疑応答の時は生あくびをしていた昇太郎だが、実技になった途端、目が炯々と輝き始めた。

その視線は、シーボルトの手技を一片たりとも見逃すまい、という気迫に満ちていた。

やがて「そろそろひと休みにします」とシーボルトに付き添った

青年が告げた。その瞬間を捉え、昇太郎が立ち上がる。

「あのお、ひとつ、質問があるのですが」

すると日本語を解さないものの意図を察したのか、立ち上がりかけたシーボルトは椅子に座り直す。居並ぶ奥医師たちが、身の程知らずの新参者に非難の目を向ける。

だが、昇太郎は臆せず、朗々と質問を述べる。

「オランダは日本との貿易で大変な費用が掛かっているとお聞きします。それなのに日本と、このような付き合いを続けている理由は何なのですか」

質問をお付きの青年に訊させたシーボルトは、驚いて目を見開く。それは奥医師どころか他の文人や幕府の役人からも、これまで聞かれたことのない類いの、毛色の変わった質問だったからだ。

自分にはそれに答える確たる知識はない、と言いかけたシーボルトは、開きかけた口を閉じて、少し考えた。

シーボルトはいろいろな顔を持ち合わせていた。医師、医学者、博物学者、人類学者。それに加えて外交官や政治家、果ては商売人の資質も持ち合わせていた。

そんな彼は、鎖国をしている日本の現状について、誰よりも深く知悉し、強い危機感を抱いていた。

ナポレオン戦争後、揺れ始めた欧州や、独立を果たし国力を蓄え

つつある新大陸の米国が外に向け勢力を伸張しつつある現状を知悉し、危惧していたからだ。

鎖国と国内の権威主義によって、日本は無知な状態に置かれている。今のままではこの国は、やがて大きな不利益を蒙ることになるだろう。

そのような予見をしたシーボルトは、今こそ日本は変わるべき時だと考えていた。

彼は日本を心底愛し、むしろ日本人よりも純粋な愛国精神に富んだ人物といえた。

シーボルトは今、ここで自分の目の前の無鉄砲な青年に、愛国の種を植えた方がいい、と咄嗟に考えた。

「その質問に適切に答えられる自信はありませんが、日本とオランダでは、金と銀の交換レートが違っていて、日本では金を低く、銀を高く評価しているので、その差益によって、日本で値の安い金をオランダに持って行き、高く売り抜けて相当儲けている、という話は聞いたことがあります」

通訳係の付添の青年がつかえつかえで、たどたどしく訳した。彼にも使い慣れない語彙と内容だったのだろう。何度か小声でシーボルトと内容を確認している。

座に居合わせた奥医師たちは、そのやりとりに啞然としていた。

だがその場にいる誰ひとりとして、昇太郎がその言葉によって受けた衝撃を理解している者はいなかった。

——日本とオランダでは、金や銀の価値が違っていて、その差を使うことで儲けることができる、だって？ それはつまり、日本が大損してることじゃねえか。

それなのに、この場にいる人間は、へらへらと異人に媚びを売るような笑顔でいるのが昇太郎には信じ難いことだった。

昇太郎は思わず立ち上がると、周りの人間をじろじろと眺めてしまった。奥医師たちは、見慣れぬ気味の悪い珍獣を見るような目で、昇太郎を見ている。するとそれまで黙っていた老人の付添通詞つうじが言った。

「付添大通詞すえながじんぎ えもんの末永甚左衛門である。もうそれくらいでよかるう。

シーボルト先生は、長時間の対談でお疲れのご様子。このあと昼食を取り、午後の対談は未ひつじの刻の開始といたす」

シーボルト一行が退室しようとする、昇太郎の隣に座った青年が立ち上がり、紫の風呂敷包みをシーボルトに手渡した。包みを開けたシーボルトの顔が紅潮こうしやうし、風呂敷包みをお付きの者に手渡すと、その青年の手を強く抱きしめた。

しきりに何かを言い、それに対して青年は言葉短く答えている。

若い通訳の二人も会話に熱心に加わった。草花の押し花に、あんな

に興奮するなんて妙な異人だな、と昇太郎は思った。

その様子を見ながら、奥医師たちはぞろぞろと立ち去る。

上席から順に退出していくが、通り掛かりに昇太郎を見て、小さく舌打ちをする者、あからさまに顔をしかめる者もいた。

ところが最後の若い奥医師は、立ち止まると昇太郎に声を掛けた。

「君って、なかなか面白いねえ。どこの医家の人かな？」

昇太郎は胸を反らして大見得を切った。

「伊奈家の用人、田辺昇太郎とはおいらのことです。あんたはずいぶん立派な成りをしているが、人に名前を聞いて置いて、自分は名乗らないとは、一体どういう料簡りょうけんだい？」

隣で松本良甫があたふたして、「失礼ですよ」と小声でたしなめる。

若い男性はにっこり笑い、首を振る。

「確かにこれは私の方が失礼しようだ。私は奥医師で桂川家の六代当主、甫賢ほけんという。だがそれこそ失礼かもしれないが、伊奈家という医家は聞いたことがないなあ」

「そりゃあそうだろうよ。伊奈家は医家じゃないからな」

甫賢は驚いたような顔をした。

「それならどうして、医家の集まりなんか顔出しをしたのかな」

「おいらは医家をめざすことにしたからさ。それならまず、てっぺんを見ておくのが大事だろ」

「君、蘭学の心得は？」

「今から始めるところだよ」

桂川甫賢は、まじまじと昇太郎を見ていたが、やがて笑い出す。

「やっぱり君って面白い人だねえ。せいぜい頑張ってくれよ。期待してるから」

高笑いをしながら甫賢が退出すると、昇太郎の隣で、良甫がげっそりした顔をして言った。

「お願いですから、シーボルト先生にいきなり直接質問したり、畏れ多くも初対面の奥医師先生に仲間のような口を利くなんて無鉄砲なことはしないでください。寿命が縮みます」

昇太郎は松本良甫の肩を、ぱん、とはたいた。

「この程度でビビってどうすんだよ、良さん。あんな魑魅魍魎ちみもうりようみたいな連中がうろついている医の世界を、これから先、渡り歩いていこうというんだぜ。今日は名乗りを上げただけさ。でも顔見せ興業としてはまずまずの出来だったかな」

能天気な昇太郎を聞いた良甫は、もはや処置なし、という顔で肩をすくめた。

広間では、二人の若い通詞を交えて宇田川榕庵うだがわようあんが、シーボルトと熱心に話し込んでいる。

その様子を見るときもなしに眺めていた昇太郎は、いつか自分もあ

んな風に蘭人と渡り合ってみせるぞ、と思った。

すると少し離れたところで所在なさげにその様子を見ていた大通詞の老人と眼が合った。

明らかにしやばりな昇太郎を不愉快に思っているのが丸わかりの末永甚左衛門は、昇太郎と目が遭うと、わざとらしく、ふい、と目を逸らした。

長崎屋を辞した二人は、近くの鴨鍋屋かもなべに入った。

「午後の対談は出なくてもよいのですか？」と松本良甫が訊ねると、昇太郎はうなずく。

「話はちんぷんかんぷんだし、どうせ、もう質問はできないだろ。

ここらが潮時しおどきだよ。今日は素晴らしい場につれていってくれた御礼に、おごらせてもらおうよ」

鴨肉を頬張りながら、昇太郎は言う。

父に内緒で賭場にも出入りした。

父も悪たれで、遊郭ゆうかくや賭場に頻繁に出入りしていたので、隠す必要もないが、あえて言うとうと父親の後を追いかけているように見えるのがイヤだった。

昇太郎は、博打ばくちはたいてい勝った。止め時が見事なせいだ。彼は潮時を見極める達人だった。

そのことを昇太郎は、得意げによく言っていた。

「賭場で『早見えの昇太郎』と怖おそれられたおいらは、博打では負け
ないよ」

そして、大概のことは博打と同じよ、と嘯うそいた。

吉原といい賭場といい、昇太郎には悪所がよく似合った。

父・藤佐が成した財のおかげで、そうした悪所通いもできた。そんな昇太郎は気前がよく、それが彼の魅力に磨きを掛けていた。

「ところで、良さんの隣に座っていた若造は、おいらと同じくらいの年に見えたけど、誰だか知ってるかい？」

良甫はうなずく。

「蘭学塾の宇田川玄真げんしん先生の養子の宇田川榕庵殿おがきだそうです。聞くと
ところによると、文化八年（一八一二）、大垣藩おがきの藩医えざわの江沢家の長

男だった彼を、玄真先生がたつての希望で養子にされたそうです。

その年には江戸の天文方てんもんがたに『蛮書和解御用ばんしよわげごよう』が設置され、その一員
になられています。先ほど甫賢先生が、ちらりと教えてくれました」

——あんな短い時間でそんなことを聞き出すなんて、良さんも大
したもんだな。

そう思いつつ、昇太郎は言う。

「それであんなにオランダ語が流暢りゆうちやうだったんだな。でもなんか、
いけ好かないヤツだぜ。花なんか贈って喜ばれていたが、シーボル

ト先生はおなごみたいなご趣味なのか？」

「違います。シーボルト先生は日本の動植物を研究しているらしいのです。西洋では博物学と呼ぶのだそうです。榕庵殿は『西説苦多尼訶経』という西洋植物学書を四年前に刊行した、植物学の大家だ
に かきよう
そうです」

「ふうん、あの若さでねえ」と呟いた昇太郎は、遠い目をして続けた。

「それにしてもあのシーボルトというお偉い先生は、おいらと似たような匂いがしたな。頬に刀傷があるし、肝の据わった御仁のようだから、試しにちよっくら質問して、餌を投げてみたわけさ。そしてたら案の定、食らいついてきやがった。ありやあ、堅気の医者
じょう
かたぎ
の目じゃないぜ。一か八かの大勝負を前にした、腕の立つ博徒
ばくと
って感じだな。いずれにしても、とりあえず蘭語を学ばなければ何も始まらない、ということだな」

昇太郎の、そんな不遜な言葉にちよっぴりうろたえながら、松本良甫はうなずいて言う。

「そうですね。お上の医の本流は漢方で、私も苦勞しています。何分、総元締め
もとじ
の多紀家は長年、お上の御用達
ごようたし
で力をつけてきましたから。多紀家が主宰する医学校『躋寿館』
せいじゆかん
は漢方医の殿堂で、先代の多紀元孝殿
もとたか
が創設され、現在はお上直々の運営のようになってお

りますが、そこでのお作法さほうはなかなか窮屈きゆうくつなものですよ」

「そりやあ大変だ。とてもおいらにはとても務まりそうにないな」

「ええ、正直言って昇太郎殿には合わないと思います」

昇太郎は苦笑して、うなづく。

『躋寿館』って、『医学館』のことだろ。言われなくても、おいらには無理だつてことくらい、百も承知よ。それなら良さん、おいらにぴったりの蘭学塾を教えてくださいなねえか」

「江戸には素晴らしい蘭学塾がいくつかあります。なんととっても

おつぎげんたく

一番は大槻玄沢先生が開いた『芝蘭堂』、それに肩を並べるのが玄沢

つばいしんどう

先生の一番弟子、坪井信道先生の『安懐堂』あたりでしょう。先ほ

もんじん

どの桂川甫賢先生も門人のひとりです」

「じゃあ、そこはやめる。あの気取り屋半兵衛はんべえの弟分になるなんて、

ごめん

まっぴら御免だよ」

そうやってきつぱりと言いつ放つ昇太郎を呆れ顔で見た良甫は、なんとかして彼の気持ちを換えようとした。

蘭学を修学するには、その方が断然いいはずだと思ったからだ。

「そこは我慢した方がよろしいかと思えます。桂川家は代々の匙医さじい

で、先々代の甫周先生は名声高く、オランダでも有名です。甫賢先生だって、蘭学の造詣は深い。桂川家はオランダ商館長のクルチウス殿に蘭方を学ぶことが幕府から許され、幕府所蔵の蘭書を管理し

ている名家ですから、江戸で蘭学を学ぶなら、いずれどこかで行き当たることになりますよ」

「桂川甫周、か。はて、どっかで聞いたことがある名前だな」

しばらくの間、思案顔をして考え込んでいた昇太郎は、はた、と手を打った。

「思い出したぞ。大黒屋の爺ちゃんが激褒めしてた蘭医だ。『おろしあ』で日本人の名を聞いたことがあるのは甫周先生と中川先生のふたりだけ、とか言ってたな。あのおっさんが、おいらが尊敬していた甫周先生の息子とは……はてさて、困ったことになった」

「甫賢先生は、息子ではありませんけどね」と良甫は訂正して、続けた。

「甫周先生の威光がなくても、甫賢先生は当代切つての蘭方の名医です。三年前、『印度霍乱』いんどからんが大流行した時は、いち早くその年の十二月にオランダ商館経由でバタビア政庁の冊子を翻訳し、『酷烈辣コレラ（コレラ）考』として出版しています。奥医師は漢方医の独擅場どくせんじょうですが、桂川家だけは蘭方も許されている、特別な家なんです。気前もよく、先ほど帰り際に、シーボルト先生が配られた冊子をお貸しくいただきました。これです」

そう言った良甫は、懐ふとこから小冊子を取り出し、昇太郎に見せた。

「ふうん、『薬品心手録』やくひんおうちゆろくか。要は洋方の薬の品書きだな」

「その通りです。シーボルト直伝の秘本を、私如きの末座まつざの者にお貸しくださるなんて、たいそうな度量だと思えます」

「そいつはいよいよもって鬱陶しい話だな。けどよ、百歩譲って桂川のおっさんが本を貸してくれたのが善意だと認めるとしても、シーボルト先生が善意からかどうかはわからねえよ。あのオランダ人は、オランダに利がないことはやらない、とはつきり言ってたからな。つまり、この品書きを広めて、オランダの薬を売りつけようとしてるだけなんだよ」

よくもまあ、そんなひねくれた考えができるものだ、と人のいい良甫は唾然とした。ところがこの昇太郎の言葉は、正鵠せいこくを射ていたのだった。

「まあ、いいや。それより良さんよ、『芝蘭堂』と『安懷堂』の次は、どこがお勧めなんだい？」

「あととはどんぐりの背比べなんですが、強いていえば桶町おけまちの足立長雋あだちちやうしゆん先生の学塾でしょうか。人となりはあまり存じ上げないのですが、本業は産科だとお聞きしています」

すると昇太郎は満足げにうなずいて言う。

「うん、そっちの方が具合がよさそうだ。何より、兄弟子が少なそうなのが気に入った」

この人は本当に、人に頭を下げるのがイヤなんだな、と良甫はし

みじみと昇太郎を見た。

足立長雋は、薩摩さつまの医師・足立梅庵ばいあんに学び、その養子となった人物である。その後、漢方の総元締め・多紀元簡もとやすに学び、吉田長淑ちようしゆくに蘭学を学んで翻訳に従事した、漢蘭混合かんらんこんじゆうの医師である。

天保二年てんぽう（一八三二）、産科の蘭医として開業し、一家を成した。

経歴からも明らかのように、足立長雋は蘭学の本道ではなく、蘭書によらず翻訳書を使って講義をした。そのため、後に昇太郎は不満を抱えるようになる。それは蘭学の本流である桂川家を忌避きひしたために生じた皮肉な巡り合わせだったのである。

*

文政九年三月、快晴の江戸に入ったシーボルトら蘭商館長以下の六十名の一行は以後、五月十八日まで江戸に長逗留ながとまりゆうし、多数の蘭学者や幕府の役人と会っている。

従来の参府はオランダ人も型通りに従っていたが、この時はシーボルトがその枠組を崩した。

道中の風俗や地理、動植物を観察することを要望したからである。

シーボルトは南ドイツ・バイエルン王国のウエルツブルグの、医学界の名家の出だ。父のヨハンは生理学教授、祖父カールは解剖・

外科・産科教授で、ドイツ随一の外科医と称された。

親類には医学、万有学で高名な学者が多い。三代続く高名な医学者の血筋であるシーボルトには、他にも博物学者の顔があった。

日本の植物を集めて植物園を作り、塾生に課題を与え、日本の動物や社会機構についてのレポートを提出させた。それは情報収集の方法としては秀逸だったが、鎖国を旨とする幕府から見れば違法行為すれすれか、もしくは禁制破りそのものだった。

閉鎖的な国の掟しんしやくに斟酌のほうずしない野放図な姿勢が、半年後の「シーボルト事件」につながったとも言える。

文政十一年（一八二八）八月、帰国予定のコリネリウスⅡハウトマン号が長崎港に到着した。

貿易の荷を下ろした後、日本からの品を積み込み九月二十日に出帆しゅつぱんを予定していた。だが、八月九日に稀に見る強大な台風たいふうの暴風雨が長崎湾を襲いハウトマン号は難破し、稲佐いなさの浜の民家の前に座礁ざしょうした。長崎奉行所ぶせきやうが船内を調べたところ。シーボルトの八九個の荷箱の中から御禁制の品である蝦夷地えぞちの地図や、葵紋あおいもんの羽織が見えられた。

世にいう「シーボルト事件」の発覚である。

最も問題になったのは蝦夷地の地図だった。だが、幕府の奥医師である土生玄碩つちいきんが、植物由来の西洋薬で散瞳さんどうの効果がある「ベラド

ンナ」のことを聞くためにした、贈り物の中に、將軍から拝領した葵紋の紋服もんがくがあったのも大問題になった。

不敬の至りとして、土生玄碩は要職を追われた。

だが慣例からすれば、出港前のこの時期の船内にシーボルトの荷が積載されていた可能性はきわめて低い。

以上が、いわゆる「シーボルト事件」の顛末である。だが、よくよく考えてみると、慣例からすれば、出港の一ヶ月以上も前のこの時期には、貿易用の日本の荷の積み込みは、まだ行なわれない。したがって船内にシーボルトの荷が積載されていた可能性はきわめて低いのである。

またこの頃、かつて蝦夷地を探検した幕府のお庭番で樺太の発見者・間宮林蔵まみやりんざうが、蝦夷地の地図が持ち出される可能性を知り、江戸町奉行に通報したため、奉行所が内偵ないていしていたとの説もある。今となつては真相は判然としないが、事件によりシーボルトの評価は反転した。

シーボルトは国外追放に処され、協力者は死罪、牢死ろうし、流罪るざいなど散々な目にあつた。

特にシーボルトの片腕を務め、当代一の長崎通詞との呼び声が高かつた吉雄権之助よしおごんのすけが、入獄の影響で病死してしまつたのは痛手だつた。

一方、「この世の全ては金次第」と嘯いた奥医師・土生玄碩は、隠し財産を賄賂として駆使してしぶとく放免され、天寿を全うしている。

こうして当時の蘭学者にとって、シーボルトという名は、輝ける称号から一転して、忌まわしい禁句になってしまった。

シーボルトから得た医学情報や、彼との交歓の記録が、江戸や浪速の蘭学集団に不自然なほど少ないのは、そのせいかもしれない。面識がある程度のつきあいなら、関わりを明らかにする危険の方が高いからだ。

だが鳴滝塾で水魚の交わりを結んだ愛弟子の一部は、敬愛の気持ちを隠さず抱き続けた。江戸参府に従った高良斎と二宮敬作は、そんな高弟の代表的存在である。

二人はシーボルトの妻の其扇と娘のイネを、国外退去前にひと目合わせるため、漁夫の成りをして船を出し、海上で最後の面会を果たした。

それは法に抵触することで、発覚したら当然お咎めを受ける危険な行為だった。

シーボルトは感激し、残された妻と娘の行く末をふたりに託し、帰国後も頻繁に手紙のやりとりをした。

高良斎は赦免後、故郷の徳島に帰り開業したが、著書を刊行する

際、シーボルトに謝辞を捧げたため発禁処分を受けた。だがそれを撤回せず気骨を示した。

彼は後に道修町どしゅうまちの眼科の大家だった叔父・高充国たかみくにを頼り、大坂で開業し、洪庵こうあんと呼称するようになる章とも親しく関係を結ぶようになる。

その一方、鬼才・高野長英たかのちやうえいのように、さつさと姿をくまらずもいたし、伊東玄朴げんぼくのように、改名することで難を逃れた者もいた。

それは当時の、閉鎖的な社会を考えれば、やむを得ない処世術だったともいえる。

シーボルトの失墜は大坂で緒方章おがたあきらや中天游なかくてんゆう、江戸で田辺昇太郎や松本良甫がシーボルトと面会した半年後のことになる。

シーボルトは帰国後の後年、江戸参府をした時の詳細な日記を発表している。けれどもその日記には、江戸参府の数日間と大坂滞在の五日間の記載が抜け落ちている。

禁制の蝦夷地の地図を持ち出した協力者の名を秘すために、後日削除したのではないかとも言われているが、定かではない。

それでもシーボルトが日本の蘭学、医学に計り知れない影響を与えたことは間違いないだろう。

たとえば彼が国禁を犯したとしても、シーボルトには博物学や地政学を極めたいという、純粋な学術的な興味を追求しただけだった。

そしてそこには日本を害する意図はなく、近代国家として自立してほしいという強い愛情があったことは、彼の帰国後、そして再来日の際の言動から見ても明白だろう。

そのことは帰国後、そして再来日の際の言動からも明白である。

田辺昇太郎や緒方章がこの江戸参府の際、シーボルトと対面したという正式な記録はない。

しかしこの頃の幕府の締め付けの厳しさと、罪人とされてしまったシーボルト絡みということを考え合わせると、記録がないこととその事実がなかったということは、必ずしも一致するものではない。

なお日本では医師として名高いシーボルトだが、本人にはその意識は希薄きはくだったように思われる。

ドイツのミュンヘンにある彼の墓の墓碑銘ほひめいには次のように記されている。

「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト 陸軍大佐、植物学者、日本研究者」とあり、そこに「医師」の文字は刻まれていないのである。

4章 安懷堂の駿馬しゅんめ 天保元年（一八三〇）

文政十一年、「シーボルト事件」という大嵐が、蘭学の世界を吹き荒れた。

その後、長崎、江戸、京都、大坂など蘭学が盛んな土地では蘭学者への風当たりが強まり、肩身の狭い思いをしていた。

それは浪速の蘭学会堂でも同じだった。

蘭学者はより一層、学問に精進することで、世間の非難の視線から気を逸らした。

その頃、天游の「思々齋塾ししさい」では章の存在は抜きん出て、浪速でも名を知らぬ者はいくらいになっていた。

章が天游の一番弟子であることは、もはや衆目しゅもくの一致するところだった。

そんなある日、一心に蘭学書を読んでいた章を、天游は散歩に誘った。

片袖かたそでの着物姿で、ふらりふらりと町を歩く天游のあとを、章はついていく。

頬を撫でる春風が心地よい。

やがて浪速橋のたもとに着くと、天游は川端にごろりと寝そべり、

腕枕をして空を見上げた。

章は隣にその腰を下ろして膝を抱え、きらきら光る川面を眺めた。

橋の向こうに合水堂が見える。

けれども今の章には、かつて抱いていた、どうにもならない焦りの気持ちはなく、合水堂の威容から压迫感は消えていた。

目の前の小柄な天游が、章の鬱屈と劣等感を解き放ってくれたのだ。

——お師匠さんと出会ったあの日、私の人生は変わったのだ。

草の葉を口にくわえた天游が言う。

「章、天游文庫は大凡、読み終えたようやな。弟子になってまた四年なのに大したもんや」

その言葉には万感の思いが込められていた。当時の蘭学は身命を賭し、生涯に掛けて学ぶものとされた。そのため、晩婚の蘭学者は多かった。五年の蘭学修行など、まだほんのとば口に過ぎなかったのだ。

「思々齋塾」には、天游の義理の叔父にあたる蘭学者・宇田川玄真の翻訳した書がたくさん置かれていた。「西説内科撰要」「和蘭内景医範提綱」「和蘭局方」「和蘭薬鏡」などの書物の他、玄白の実子の杉田立卿が訳した「眼科新書」もあった。

それらを全て読破した章は言う。

「蘭医学の輪郭は、未だにぼんやりとしています」

「まあ、せやろな。そんなら章、お前は江戸に行け」

章は驚いた表情になる。

「なぜ、いきなりそんなことをおっしゃるのですか。絶対にイヤです。私には天游先生から学びたいことが、まだまだたくさんありますから」

「ワテが教えられることは確かにまだまだある。それはほんまのことや。けどな、章が読むべき本は、もうウチにはなくなってもうた。

せやけどこの世にはまだ読み切れんほどの書がようけある。天游文庫なんぞ大海の一滴にすぎん。それを読破して満足しているようでは、一番弟子と呼ぶわけにいかん」

そう言った天游は、遠い目をした。

「ワテはもう四八歳や。月日が経つのは早い。若い頃、江戸や長崎、京都に行って学んだ。土地が変わる度に新しい師匠と出会い、たくさん書と巡り会った。章は、ワテの若い頃のような勉強をすべき時が来たのや。まずは江戸、そして長崎に行け。世の中は広いで」

「でも……」

なおも惑っている章に、天游は続けた。

「章、空を見ろ」

章は天游に倣って、隣に寝そべった。

空は青く、どこまでも高かった。

「お前と出会った時、この大地が動いて、お天道さまの周りを回っている、と教えてやったな。どや、大地が動いているように感じるか？」

「いえ、まだ実感はありません」と章は正直に答えた。

「まあ、それが正直な気持ちやろ。でも学問を知れば、実感したことが真実と限らないということがわかるはずや。ええか、空はどこでもつながっているし、地球は丸いからどこまでも真っ直ぐ歩いていけば、いずれここに戻ってくる。いろんな所へ行き、いろんな師や友と語らい、たくさんのお話をし、もともとと大きくなってここに帰ってこい。ええか、江戸にいが長崎に行こうが、章はワテの一番弟子に変わりはないのやで」

章は身を起こし、隣に寝そべっている師を見た。

片袖の着物から飛び出した腕は、すっかりか細くなっていた。

塾生が増え、塾の運営も容易ではない。章を手元に置いておけば、

天游も楽ができる。

最近では蘭語の力もついて、塾頭じゆくしやうとして天游の代講をして後輩の塾生に教えることもできるようになった。

天游はそんな章を手放そうと言うのだ。それは彼の人生を考えてのことだ。

章は胸が熱くなった。

「わかりました。先生のご指示通り、これから江戸に出て、修行して参ります」

天游は身を起こし立ち上がると、裾を払った。そして大きく伸びをすると言った。

「よう言うた。それでこそ草や。江戸には宇田川玄真先生がおる。さだの父上と義兄弟の縁を結び、『江戸ハルマ』を作ったお方や。お前はすでにここで、玄真先生の翻訳本をようけ読んどる。ワテは玄真殿と手紙のやり取りをしとるが、その文によれば、玄真先生のお弟子に坪井信道先生ちうのがいて、これがまた、実によく出来る蘭医学者らしいぞ。去年開いた『安懷堂』の医院には患者が殺到して大繁盛、併設した学塾には原書が十冊、写本も二十冊あるそりや。よければそこを紹介したるわ。どや、わくわくしてくるやろ」

緒方章は、うなずいた。

「是非、坪井先生をご紹介ください。私は、江戸で学び終えたら必ず、ここに帰ってきます」

「当たり前や。ここは浪速の、章の家なんやからな」

天游の言葉に、章は泣きそうになったが、懸命に涙をこらえた。

一カ月後、章は江戸へ出発した。

天保元年（一八三〇）四月、章二一歳の春の旅立ちである。

旅立ちこそ順調だったが、江戸まであとわずかという宿場町でふと気が緩んだか、枕元に置いた財布を盗まれてしまった。章は路銀ろぎんを使い果たし、腰の大小まで売り払う羽目になった。

そしてようやく江戸にたどり着いた頃には、無一文になっていた。

章は、大川のほとりに佇たずみ、「安懷堂」の建物をぼんやりと眺めた。

普通、学塾に入門するためには、束脩料そくしゅうを始めとする、諸々の実費が必要になる。

「安懷堂」の費用は他の蘭学塾と比較すると相当安く、たとえば当時流行はやっていた、伊東玄朴が開いた蘭学塾である「象先堂しょうせんどう」の束脩料の半額程度だった。

しかもその束脩料の分は、師匠の天游がなけなしの金を餞別せんべつとして渡してくれ、父も苦しい中から捻出してくれたものだった。

どんなに困ってもそれには決して手を付けまいとして、わざわざ別の財布にしまっておいたのが、却って裏目に出してしまったのだ。

すっかり気落ちした章は、輝かしい目的の地を前にして、呆然と佇むより他はなかった。

気がつくくと、塾の目印になっている柳の木を見ながら、衝動的にその前の渡し場で、渡し船に飛び乗っていた。

——ええい、くよくよ考えても仕方がない。上総かずさに行き、入門料を稼いで再起を図ろう。

上総には天游の知人がいると聞いていて、それを当てにしたのだ。だがたどりついてみると知人はおらず、天游の縁はそこでふつりと途切れてしまった。

とりあえず章は、手当たり次第にいろいろな仕事をしてみた。

しかし、蘭学以外に特技のない若者が、簡単に食い扶持ぶちを稼げるほど世の中は甘くない。

海辺に行き漁師から売り物にならない魚を分けてもらったりしながら、なんとか細々と食いつないだ。

そんな調子では、塾に納める金を貯めるなど、とうてい不可能に思われた。

どうもならない行き詰まりに思えたが、章は絶望はしなかった。

元服げんぷく直後、どこにも行き場が見当たらず、閉塞へいそくした状況の出口も見えずに悶々もんもんとしていた、天游師匠と出会う前と比べたら、この程度ほどのことはどうということもない。

そんなある日、「能満寺のうまんじ」という色あせた扁額へんがくが掛かっている古寺にたどりついた。

境内けいだいには金柑きんかんの木があり、黄金色の実がたわわになっていた。

気がつくとき彰はそれを、むさぼるように食べていた。

二日ぶりの食事だった。少し元気を取り戻した章が周囲を見回すと、古刹こさつの軒先に、大勢の子どもたちがしゃがんで、騒いでいる。

近づいてみると、子どもたちは軒下を見ていた。

「どうやら蟻地獄ありを見つけたらしい。

「そのくぼみには、蟻を食べる虫がいるんだよ」

章が声を掛けると、子どもたちは怪訝けげんそうな顔で彼を見上げた。

親分格と思われる子どもが立ち上がる。

「おっちゃん、うそをつくな。蟻がこんなところに来るわけないじゃん」

二十そこそこで「おっちゃん」呼ばわりとは、薄汚れた身なりのせいか、と章は苦笑した。

「嘘ではない」とは言った章は百聞ひやくぶんは一見に如かず、とばかりに蟻を一匹捕まえ、蟻地獄に落とした。

子ども達の目の前で、すり鉢のような砂穴はを這い上がろうとした蟻は、底に引きずり込まれ見えなくなった。

「ほんとだ、ほんとだ」と子どもたちは歓声を上げ、あちこちで蟻を捕まえては、気に入った蟻地獄の巣に落とす。みんな、その観察に夢中だ。

しばらくして、騒いでいる子どもたちに、章は言った。

「その虫は蟻地獄と言って、秋になると、蜻蛉かげろうという、トンボみた

いな虫になるんだよ。いや、嘘じゃない。ずっと観察を続けていれ
ばわかることだ。それより、もっと凄いことを教えてあげよう。こ
の大地は動いていて、お天道さんの周りを回っているんだよ」

章は大地をどん、と足で踏みしめた。

子どもたちはぼかんと口を開け、狂人を見るような目に変わった。

「地面が動くはず、ないじゃん」と親分が言う。

「大地はあまりにも大きいから、そう思えるだけだよ。それはカピ
タンの偉い学者が証明した、本当のことだよ。君たちが知らないだ
けなんだ」

「じゃあ、地面が動いているって証拠を見せてよ」

章は考え込む。端から信じる気のない子どもたちを納得させるよ
うなことは……。その時、章は閃いた。

「三日後、少し遅い亥いの刻頃、お月さまを見るとお月さんが次第に
欠けていく。それが、大地が動いている証拠だ。おうちでお父やお
母に頼んで見せてもらおうといい」

すると寺の本堂の暗がりからのっそり、巨漢が現れた。

「大地が動いているというその証拠を、儂も拝見してみたいですな」

「わあ、善信ぜんしん和尚おしやうさんや」

子どもたちがまとわりつくつと、和尚は懐から饅頭まんじゅうを取り出し、子
どもたちに分け与えた。そして、そのひとつを章にも手渡すと言っ

た。

「あなたの言葉が本当かどうか、ここにいる子どもたちと共に確認させてもらいましょう。お寺に泊まると言えば、親御さんたちも安心しますからな」

こうして皆既月食が起きる三日後まで、章はこの寺に厄介になることになった。

師匠の天游が初めて会った時に語ったのと同じことを言っている自分に気づいて、苦笑し、そして思った。先生は遠く離れた地でも私を守ってくださっている。ありがたいことだ。

私はいつまでも経っても不肖ふしょうの弟子なのだ、と章はしみじみ思った。

三日後の夜、集まった子どもたちは、初めて見る月食に歓声を上げた。

「白いお月さんが赤黒くなったよ。こんなの、初めて見た」

それが大地が動いている証拠だということは納得できないようだったが、章が嘘をついたり法螺ほらを吹いてはいないことは理解したようだ。

そして同じ月食というものを見ながら、それが大地が動いている証拠だとわかる章に、尊敬の念を抱いてくれたようだ。

その様子を眺めていた善信和尚が言った。

「あなたの知識は子どもだけでなく、むしろ大人たちにも伝えるべきですな。学塾を開き、授業料を取ればよろしい。さしつかえなければうちの本堂をその場として提供しましょう」

「こんなことを教える程度で、お足をいただくなんて、とんでもない」

「いやいや、あなたのお話には、お金を出す価値が十分ありますぞ。それにあなたも金子が入り用なのでしょう？ この貧乏寺に、いつまでもあなたを居い候さうろうさせる余裕はありません。学問を教え学費を稼いで、当寺にお布施ふせしていただけるとはありがたや、南無阿弥陀なむあみだ仏ぶつ」

和尚に拝まれてしまつては、章は何も言い返せなくなつた。

こうして章は能満寺で、師匠譲りの「曆象新書れきしやう」を教え、塾生を集めた。そこは同時に子どもたちを教える寺子屋てらこや、病人を診る医院も兼ねることになった。

さだに鍛えられた医術は優れたもののはずだが、なぜか章の医院は流行らなかつた。

その一方で、学塾と寺子屋は盛況だった。

和尚に言われ、塾に名を付けることになった。章は少し考えて言つた。

『適當』という言葉が好きなので、『適塾』と名付けたいと思いま
す」

「ほう、あなたのように生真面目な方が、それはまた意外な」

「私は生真面目すぎるのです。私の師は適当な方ですが、すべてが
適切に思えます。あの融通無碍ゆうずうむげさに憧れているのです」

「学問伝授の場であり、寺子屋であり、医院でもある。確かに適当
ですな」と、善信和尚は、腹を揺すって笑った。

章の塾は評判になったが、「曆象新書」の天文学は、なかなか信じ
てもらえなかった。そんな章に僥倖じやうべいが訪れた。

七月十七日、再び皆既月食が起こったのだ。

この時は能満寺に子どもたちの他、門人が集まった。月食を見て
驚く大人に、子どもたちが「な、章先生の言った通りだろ」と得意
げに言う。

最初の月食と違い、この時は門人や住民は章が教えた地動説を理
解できないまでも、知ってはいた。なのでその月食は、学説の検証
という顔を持っていた。

それは章が教えた学問に、血肉が与えられた瞬間だった。

その日以後、能満寺の適塾の門人の数は倍増した。そして寺にた
っぷりお布施をしても、まだ十分な金子を蓄えることができた。

そして上総国に漂着してかっきり一年後、能満寺の塾を畳んで、満を持して江戸に向かった。

天保二年二月。およそ一年の回り道を経た後、章は深川ふかがわの三好町みやじの坪井信道の「安懷堂」の門を叩いたのであった。

ぼろぼろの服を着た章は、江戸に入る大木戸口を抜けた。

彼は青空に向かって拳を突き上げ、大きく伸びをした。

——やっと、江戸に戻ってきたぞ。

緒方章は二二歳になっていた。

*

大川（隅田川）を下り仙台堀に入ると「海辺橋」、次が「亀久橋」かめひさ

で、その先は木場きばとなる。

深川の三好町と冬木町ふゆきは「海辺橋」と「亀久橋」の間の南岸にあたる。

坪井信道は三五歳で、深川木場の三好町に「安懷堂」を開いた。

そして章が入門した翌年の天保三年（一八三二）、近くの冬木町に「日習堂」を開設した。

その蘭学塾兼医院は当時、江戸一との呼び声が高かった。

坪井信道は美濃国みのの農家の出で、幼くして両親に先立たれ兄に育

てられた。

文化二年（一八一五）、二一歳の時に医を志して中津の医師、辛島なかつからしま 正庵しょうあんに師事して、そこで宇田川玄真が著した不朽ふきうの名著、「医範堤網」と出会い、西洋解剖学の精髓せいすいさに衝撃を受けた。

「医範堤網」は解剖学、生理学、病理学を平易に解説した、当時の最高の医学書だった。

信道は広島の蘭方医、中井厚沢に師事し、その後江戸に出て、深川の宇田川玄真に入門した。

貧しかった信道は玄真の玄関番をしつつ、按摩や「江戸ハルマ」の筆写で学費を稼いだ。

貧民には無料で診療した信道は、「生き菩薩ぼさつ」と呼ばれた。

章が入門した当時の「安懐堂」は住居と塾が一棟ずつの二階建てで、玄関に薬室、座敷、書齋、茶の間、台所、女中部屋などがあった、広々としたものだった。

塾は前塾と後塾があり、住居二階の六畳と八畳が塾生部屋だ。

塾の前には、しだれ柳を植えた仙台堀の船着き場がある。信道はここから客人と船に乗り、佃島つくだじまの海で漁夫に網を入れさせ、船中で料理して客をもてなすという。一度は絶望してその船着き場から上総に向かった章は、今回、ようやく目指す学塾に入門できたわけだ。

生涯の師となる坪井信道は三六歳の男盛り、小柄だが筋肉質で威

敵があった。服装は質素だが、きちんと整えられていた。

応接間に通された章はいきなり、穏やかな声で叱責しっせきされた。

「一体、どこで何をしていたのかね。私はお前さんが来るのを一日千秋、首を長くして待っていたのに、一本の文すらない。浪速からは天游さんがしびれを切らし、やいのやいの催促だ。まったく困り果てたよ」

生真面目な章は恐縮して、入門しそびれた顛末てんまつを恥じて、手紙を書くことが憚はばかられたのだ、と懸命に謝りながら、この一年間の出来事を話した。すると信道はにっこり笑った。

「寺で塾を開いたとは、いいことをした。今は蘭学の素養のある者を増やすことが大切だ。さすが天游さんご自慢のお弟子さんだ。だが本塾は実力主義だから実際を見て評価させてもらう。早速明日から会読に加わりなさい」

「いえ、自分の不手際ふてぎわで一年も修学が遅れてしまったのです。未熟者の私は一刻も早く、遅れを取り戻したいので本日、たった今から会読の末座に就かせていただきましたたく存じます」

信道は目を細めて、章を見た。

「好きにしなさい。因ちなみに今、会読しているのは『扶歇蘭土神経熱論ろん』だよ」

「なんと、『フーフエランド』の内科書を読めるのですか」

章は偶然に打ち震える。

かつて浪速でシーボルトに、医師の心構えと医学の修学の仕方について質問した時の答えが「フーフランドを読むべし」という言葉だったのを思い出した。

章が新たに師事した坪井信道は、旧師・中天游とはなにからなまでに全てがまったく違っていた。

一番の違いは、学業と医業を両立させようという気概があったことだ。天游は医業には不熱心で、愛妻のさだに丸投げしていたが信道は自ら先頭に立ち、診療に当たり、弟子たちに手を取り足を取り、丁寧に教えた。

信道は二九歳の時、師・宇田川玄随げんずいの命を受け、オランダ・ライデン大教授の「ブルーハーフェ」の医学書の翻訳に取り掛かり、三歳で訳了した。文政九年のことである。

「万病治準まんびょうちじゆん」と題したその書は、ブルーハーフェ教授の言葉を弟子がメモした箴言集しんげんであるが、全二巻の大部なので、それとは別に、要約した「診候大概しんこうたいがい」全一巻を刊行した。

「安懷堂」では「診候大概」を教科書として使用した。

その書は日本初の本格的診断書として評価が高かった。

塾ではオランダ語文法や脈の数え方、体温の測定法、患者の病状、診断を教授し、議論も重ねるといふ、近代的な医学教育を実施して

いた。

信道はまた、西洋の医聖・ヒポクラテスの思想を体得していた。

章は師・信道に、医のこころを叩き込まれた。印象深いのは「日習堂」の「薬室」当番だ。当番の時は雑談を禁じられた。

信道はその理由を、巻物にして床の間に掲げていた。

「病人の頼りに思う処ところの者は医者なり。医者いしやの頼む処は薬なり。薬剤もし差誤ある時は、ただに患者を困苦せしむるのみならず、ややもすれば生命を奪うに至る。怖れおそざるべからざるなり。監剤かんざい作剤さくざい極めて謹慎きんしん篤実とくじつならざるときは差誤なきこと能あたわず。もし無事むじを冥々めいめい中に殺すことあらば、天地鬼神これを何とか謂いわん。西洋流薬物は殊ことに峻劇しんげきの品多し。毫釐ごうりの差にて功罪こうざい忽變とつへんす。尤も謹慎めいべん明弁めいべんせざる可べからざるなり」

病人が頼るのは医師であり、医師が必要とするのは薬である。その薬の扱いを間違えたら、直ちに患者の命に直結する。従って薬を扱う時には間違いのないように、ほんのささいな間違いもあってはならない。

そのような厳格な言葉で薬の重要性を説き、厳正な医のこころを伝えた師・信道の言葉は、章の五臟六腑ごそうりくぷに染みわたった。

坪井信道は当代きつての蘭学者であり、根っからの臨床家りんしやうだった。

医療で患者を救うことを、何よりも優先していた。

そこが、学術世界に専念できる境遇を一番の願いとした中天游との、大きな違いだった。

信道は、師・宇田川玄真が研究に没頭するあまり、患者を診ないことに憤くやみおこっている。

そんな坪井門下には綺羅星きらぼしの如き俊才が集まった。

奥医師の桂川家の第六代当主・桂川甫賢も門人に名を連ねたひとりだ。甫賢はシーボルトと交わり、バタビア芸術科学協会員にもなり、漢方と蘭学の両者の長所の活用に励んだという、異色の名医である。

能満寺の学塾で手持ちを増やした章だが、物価がばか高い江戸でたちまち懐は寂しくなった。

そこで導引術あんま（按摩）を学び、義眼ぎがんを作成して日銭ひぜにを稼いだ。

そんな風にしてひたすら修学に励んだ章の熱意に感心した信道は、彰を住み込みの玄関番にして雑用や急な翻訳の依頼に対応させ、授業料を免除した。

それはかつて信道が師・大槻玄沢の「芝蘭堂」で受けた対応と同じだった。蘭医の善意の連鎖は、連綿と引き継がれていったのである。

着物を購う余裕がなく、破れた服を着ている章を哀れんだ信道は、自分の古着を与えた。

信道は背が低かったので、長身の章が身につけると手足が飛び出し、奇妙な成りになった。

だが章は一向に気にせず、師匠のお下がりを着て、脇目も振らず一心不乱に修学に励んだ。

こうしてめきめきと力をつけた章は、「安懷堂」にある書籍を片っ端から読破していった。

その成果で、それまで薄い膜まくがかかっていたようにぼんやりしていた蘭語が、目から鱗うろこが落ちたように、くつきりと読めるようになった。

進境しんけい著ちゆうしい章は、師匠の信道から、今後の「安懷堂」の声価を左右するかもしれないような大命を受けた。

それは信道が長年温めていた構想で、ローゼの「人体生理学書」を翻訳せよ、という、困難極まりないものだった。

だがそんな難題を、なんと入塾わずか一年半の新参者である章は、見事にやり遂げたのだった。

天保三年（一八三二）、章の翻訳した書は、「人身究理学小解」と題して刊行された。

こうしてついに章は「安懷塾」の塾頭に昇り詰め、その名は江戸の蘭学界に鳴り響いた。

そんな水無月に、章はひとりの男と運命的な出会いをする。

それは章にとって、決して好ましいと思えない相手だった。けれども、その出会いこそが、それ以後の章の人生に大きな影響を及ぼすことになるのだった。

*

ここで江戸時代の蘭学の流れの概略を、俯瞰してみよう。

蘭学は元文五年（一七四〇）、青木昆陽が蘭語の疑問を商館長に質す許可を得た時に始まる。彼は八代將軍吉宗に、蘭書の公開を招請し、蘭書が世に広がるきっかけになった。

だがそれらは全て、長崎の通詞の協力があつてこそその勢威だった。

その真ん中に鎮座していたのが巨星・長崎オランダ通詞・吉雄耕牛である。吉雄耕牛は、蘭医学の外科学を修得し、長崎蘭学の牽引車となった十七世紀の大家である。

寛延元年（一七四八）に、二五歳の若さで大通詞になると、以後五〇年余の通詞職の間に年番通詞（通詞団の当番幹事）十三度、江戸番通詞（江戸参府随行通詞）を十一度勤め、長崎奉行の用務も担当するなど、当時最高の通詞と謳われた。寛政二年（一七九〇）に誤訳事件に連座し蟄居するが、寛政八年（一七九六）に赦免され、翌寛政九年（一七九七）には幕府蛮学指南に命じられている。

耕牛は蘭館医ツンベリーに医学を学び、梅毒治療薬、水銀水（昇しょう汞・塩化第二水銀）の処方を得た。家塾「成秀館」では紅毛（オランダ）文字から西洋医学の診療法まで教授し、修了には二年を要した。

杉田玄白はこの梅毒治療薬の処方を教えてもらい、財を成している。

珈琲を愛飲し、牛を飼い牛乳を飲んだ。ラクダやワニやナマケモノを飼っていた屋敷の二階は、オランダに学んで敷瓦にし、青漆塗の梯子欄干を設け「オランダ座敷」と呼ばれた。

屋敷には望遠鏡、顕微鏡、天球、地球儀、オクタント（八分儀）、タルモメートル（寒暖計）など、オランダ科学の粋を示すエキゾチックな品々で溢れ返っていた。耕牛の屋敷とは、当時の日本の中に存在した、まさに「異国」だったのである。

吉雄流医術は、榎林流医術と共に、紅毛流医術の双璧を成した。「蘭学第一世代」は、昆陽の弟子で「解体新書」刊行に携わった杉田玄白や前野良沢、中川淳庵、桂川甫周の面々である。

杉田玄白が、江戸参府した吉雄耕牛からハイステル外科書を貸与され、中津藩医・前野良沢が長崎で吉雄耕牛と榎林栄左衛門に師事し西洋医術と蘭語を学び、帰京した明和六年（一七六九）から、「解体新書」が刊行された安永三年（一七七四）までの五年間が彼らが

最も活発に活動した時期である。

当時は鎖国で、長崎屋訪問は制限されていた。だが内密に訪れる者も多く、役人や長崎屋主人の伝手で友人・知人として訪れる者もいた。

「エレキテル」の発明者、平賀源内ひらがげんないや欧風画家の走りとなった司馬江漢しほかんもそうして訪問した口である。

明和八年（一八七一）二月の蘭館長の江戸参府の際、玄白は「ターヘル・アナトミア」を購入する。町奉行から刑死人の腑分けの見学許可が玄白の許もとに届いたのは、直後の三月三日。前野良沢と中川淳庵に報せ翌四日、女の刑死人の腑分けを見学し「ターヘル・アナトミア」の正確さに感銘を受け、翌五日には中津藩江戸屋敷の良沢宅にて翻訳を始めた。そこに石川玄常げんじょう、桂川甫周などの俊才が加わり、グループで翻訳作業に勤しんだ。「解体新書」刊行でも吉雄耕牛が果たした影響は大きく、前野良沢は「解体新書」の序文を耕牛に依頼している。

「解体新書」の二年後の安永五年（一七七六）には、オランダ商館長の江戸参府に随行した上外科ツェンベリーが、日本の蘭医を指導した。三八歳の中川淳庵と、二六歳の將軍侍医の桂川甫周は特に熱心で、ツェンベリーは二人に、梅毒の水銀水内用や外科器具の用方を伝授した。

二人はツェンベリーから、オランダ語の修学証明書を授与され、大喜びしている。

川甫周は寛政四年、「おろしあ」で十年間漂泊した伊勢の大店の主・大黒屋光太夫と船員の磯吉を、將軍家斉が吹上御所でじきじきに尋問した際、「漂民御覽之記」と「北槎聞略」として記録して刊行した。その際、二人の面倒をみた。ペテルブルグ大学の教授が、日本植物誌に掲載されていた桂川甫周と中川淳庵の名を知っていたということを、自らの筆で記録している。

当時、出島のオランダ商館長の江戸参府は、五年に一度になっていた。一行が三月頃、江戸に着く時期には、江戸で定宿となっていた長崎屋に、西洋の知識を吸収しようと蘭学者や奥医師が集結した。

江戸参府がない年は、長崎通詞がオランダの献上品に付き添って参府した。

このように長崎の通詞との交流は毎年、春先に定期的に行なわれていたわけだ。

長崎屋での蘭人との対談は、將軍の侍医や天文方のような直参は簡単に許されたが、陪臣は煩雑な諸手続が必要となった。そこで將軍侍医の桂川甫周が、江戸の「蘭学第二世代」となる大槻玄沢や宇田川玄随に、長崎屋訪問を斡旋した。関西では橋本宗吉や海上随鷗、

齊藤方策^{ほうさく}、各務文献^{かがみぶんけん}、伏屋素狄^{ふせや}など、浪速の会堂に集った面々が相
当する。

一関の藩医の大槻玄沢は四年間、玄白に師事し、その命でドイツ
の外科医「ハイステル」の外科書の翻訳に着手した。天明五年（一
七八五）には半年弱、長崎に留学している。

大槻玄沢は天明八年（一七八八）、江戸詰の仙台藩医に召し抱えら
れ、蘭学塾「芝蘭堂」を京橋に開いた。この年に刊行した「蘭学階梯^{かいてい}」
は、上巻でオランダの国情や科学、医術、蘭学発展史など、多岐に
わたる分野について触れ、下巻では簡便にオランダ語を紹介した蘭
学入門書だったため、当時の蘭学志望者の聖典となった。

大槻玄沢と双璧を成した宇田川玄随は津山藩医の子で、オランダ
の内科医「ゴテル」の内科書を翻訳した我が国初の西洋内科書「西
説内科撰要」を刊行した。この書を三巻まで刊行したところで玄随
は四三歳で早世した。その後、版權は大坂に移り、京都の小石元俊^{こいしげんしゆん}
の援助にて、文化七年（一八一〇）に全十八巻の完結をみた。

ロシア船が蝦夷地や日本近海に頻繁に姿を現すようになると、危
機感を抱いた幕府は、志筑忠雄門下の俊英・馬場佐十郎^{ばばさじゆうろう}を世界地図
編纂の責任者として召し抱えた。

馬場佐十郎は蘭、仏、露の各国語に通じた、語学の天才だった。

文化八年（一八一二）に幕府の天文方に蛮書和解御用が設置される

と、「シヨメル」の百科事典の翻訳に着手した。

後にその書は「厚生新編」こうせいしんぺんとして刊行されるが、その翻訳事業に

は大槻玄沢の弟子の宇田川玄真、玄真の養子の宇田川榕庵みなたろうあん、湊長安

「蛮書和解御用」となった箕作阮甫みつくりげんほ、玄白の孫・杉田成卿せいけいなどが参

集した。

彼らが蘭学の更なる飛躍を担う、「蘭学第三世代」である。

ここで私学だった蘭学が、公認の学問になったのである。

宇田川玄真は、杉田玄白に才を認められ養子となるが、放蕩ほうとうが原因で玄白に離縁された。

それを大槻玄沢門下の稲村三伯いなむらさんぱく（海上随鷗）が桂川甫周、大槻玄沢らと協議し、玄真を稲村三伯の義弟とした後に宇田川家を継がせた。

こうした差配によって、宇田川玄真は天游の岳父である稲村三伯（後の海上随鷗）と義兄弟の間柄になり、海上随鷗の娘婿の中天游とは叔父・甥の関係となった。

宇田川玄真は津山藩医としてよりも、「一書より百医を導く」と考へ翻訳と著述に精励した。玄真の翻訳書「和蘭内景医範堤綱」は、当時の最高の内科書となった。

そんな風に、優秀だが俗物の欲に塗れた宇田川玄真の弟子が、坪井信道である。

信道は塾でも束脩費を低額にして、医院で稼いだ金を塾の経営につき込み塾生の負担をできるだけ少なくした。また医院では貧乏人からは治療費を取らず、住民からは「生き菩薩」として崇められていたことは前述した通りである。

天游が章の修学を委任した坪井信道とは、欲得を無視した高潔な人格者であり、当代一の優秀な蘭学者であり、学生に温かく接する教師であり、熱意溢れる医師だったのである。

文政九年、大槻玄沢は「解体新書」の再訳となる「重訂解体新書」ちやうていを師・玄白と共著で刊行するが、そこに挿画された解剖図を銅版画で仕上げたのが、中天游の従兄弟の中伊三郎いさぶろうだった。

なおこの時に、旧版の「解体新書」の冒頭を飾った吉雄耕牛の序文は削られることとなった。

それは当時の江戸の蘭学者が、ついに長崎蘭学をついに超えたと、いう、衝天の自負を持つに至ったが故の選択だったに違いない。

けれどもその頃の長崎では蘭学の巨峰、志筑忠雄がケンベルの「日本誌」を翻訳するなど、まだまだ江戸の蘭学の及ぶところではない力量を見せつけていた。そして馬場佐十郎や吉雄権之助という英才の弟子を育て上げ、意気軒昂いきけんこうだった。

そんな中、次世代の「第四世代」として台頭してきたのが、シーボルトに指導を受けた鳴滝塾出身の俊英たちだった。

それまでは江戸・京都・大坂に限定され、桂川、杉田、大槻、宇田川、小石など名門蘭家に支えられた蘭学界は、長崎出身の鳴滝学派により全国各地に広げられていった。

名門外の者もシーボルトに学んだことで高く評価された。

こうして蘭学の一般化を果たした「第四世代」には伊東玄朴、戸塚静海つかせいかいなどシーボルトの威名の下に江戸で成功を収め、蘭学塾を主宰する者がいた一方、シーボルト事件と蘭学弾圧の波をもろに受けて苦勞した高野長英や高良齋、二宮敬作らがいる。

「この区々たる小天地から科学的開發の光明が四方に放射する」というシーボルトの言葉を体現していた彼らは、各地に帰郷して蘭学の灯を守り、同志を集めて研究を重ね、全国各地の蘭学の祖となった。そして江戸、京都、大坂に遊学し交流を深め、蘭学の底上げを果たしていく。

緒方章と共に「象先堂しょうせんどうの雪月花せつげつか」と賞賛された青木研蔵けんぞうや大石良英えいもこの年代に属していた。

そんな風に実力伯仲し切磋琢磨した「第四世代」の薫陶を受けた「第五世代」は、外国からの圧力を受け、幕府の屋台骨が揺らぎ始めた動乱の時代に、東西の舞台に華々しく登場する。

その「第五世代」の代表となる双壁が、この物語の主人公である、大坂で適塾を設立した緒方章こと緒方洪庵であり、また、江戸で和

田塾、後の佐倉順天堂さくらじゆんてんどうを樹立した田辺昇太郎、後の佐藤泰然さいぜんである。

洪庵の塾を支えたのは、義弟となった緒方郁蔵いくざうであり、塾頭と

して大野藩校「明倫館」の頭取に就任した伊藤慎蔵しんざう、幕末の志士と

して非業の死を遂げた橋本左内さないなどだ。

また泰然の和田塾に集った佐藤尚中、三宅良斎りょうさいや林洞海どうかい、関寛斎かんさいな

ど、幕末の日本で活躍した医師たちが順天堂を支えた。

洪庵と泰然という二人の巨星の周りにはこのように、綺羅星の如き俊才たちが蝟集いしゆじうした。

嘉永時代かえいになると、蘭学の集大成として蘭医モーニッケが輸入した牛痘苗びよまうを得て、その時に生存していた蘭学の全世代が総力を結集し、世に種痘を導入するために粉骨碎身して邁進したのである。

次の「第六世代」には塾出身の福沢諭吉ゆきちと長与専斎ながよせんさい、順天堂出身の佐藤尚中や佐藤進すすむが現れた。

だが、彼らはもはや蘭学にこだわらず、福沢諭吉は英学を基盤にした広範な実学、長与専斎はドイツ医学に想を得た衛生学、順天堂の二人はドイツ外科学と蘭学から離れていく。

そうして英医学やドイツ医学へ、時代の潮流は移り変わっていった。

その後、蘭学は衰退の一途を辿り、「第七世代」を生むことなく終焉を迎える。

それはずっと先、この物語が終わる時期とぴったり重なるのである。

このように蘭学塾を経営した江戸の蘭学者たちは、緊密なネットワークを作り上げ、協力し合って学術の向上を目指した。当時の医の本流の漢方医と比し、蘭方医が極端に少なかったため、必然的に団結する必要があったのである。

だがそのオーブンスが漢方医との大きな違いとなり、旧態依然の閉鎖的な姿勢で秘伝に拘泥こうでいし続けたが故に漢方医は凋落ちようらくし、蘭方医は興隆を果たしていったのである。